
最強が行く世界その名は、マブラヴ！？

戦場へ行く破壊者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強が行く世界その名は、マブライヴー？

【Zコード】

N31950

【作者名】

戦場へ行く破壊者

【あらすじ】

彼、夜神 海斗は色んな世界に行くことができる力を持っている、行く世界の先々では色んな呼び名がある、神や死神や悪魔や救世主や破壊者や創造主などなど言っていた。そんな彼が次の世界に行こうとしたら神に呼び止められ、とある世界を救つてほしいと頼まれた、いくつかの願いを彼は言ってその世界に行くのでした。たぶん。

ぶっちゃけ言ってネタに走ります。シリアル?なにそれ?おいしいの?ややハーレム気味にしていくつもりです。チョーリース。

プロローグ（前書き）

ちょっと書いてみました。続くかぎりからは分かれませんが、読んでくれたらありがとうございますー。アドバイスとかもくれたら下さい。

プロローグ

「プロローグ」

「エリは、どうだ？」

白い空間の世界に歳が17～18歳ぐらいの一人の少年が立っていました。彼の名前は「夜神 海斗」（ヤガミ カイト）である。いろんな世界を旅している、最強の男である。

「何で俺はこんな所にいるんだ？たしか、前の世界の旅が終わったから転移魔法で新たな世界に旅立った筈なんだが？」

と色々と思考してると、目の前に光の球が現れました。

「なんだこの光の球は？」

「私は神です」

「おおおー喋った！…そして行き成り神発言ー…？」

「貴方をここに連れてきたのは、お願いがあつて連れてきました」

「お願い？」

「はい、実はある世界をBETAから救つてほしいのです」

「BETA?なんだそれは？」

- 人類を滅亡の淵に追い込んだ異形の生命体、それがBETAです。
なお、BETAとは、*Beings of the Extra-Terrestrial* or *origin which is Adversary of human race*（人類に敵対的な地球外起源生命）の略語です。現在
BETAは8種類います。

「ふうん、とにかくこの人間はどうやって、BETAに対抗しているんだ？」

・向こうの世界には、人が開発した機体「戦術機」があります。

「戰術機？」

- 戰術機とは、対BETA用に開発された人型兵器のことです。

「へえ～、MSみたいなものか？」

- MSよりかは、性能は低いですがそんなところです。

「なるほどな、大体分かった。つまり、その世界の奴らと手を組んでBETAとやらを、殲滅すればいいんだな。」

- はい、大体そんな感じです。

「だが、断る……！」

ええええええええ！－何故ですか！？

神はあまりの驚きに聞き返す。

「俺は群れるのは嫌いでな。やるなら一人でやりさせてもらひ。まあ、ヤルことはやるさ。」

「うう、わかりました好きにしてください。それでは、さっそくですけど何か必要な物とかありますか？BETAの数は半端ないですから、よく考えて決めてください。」

「んん~、そうだな~。まずは一つ田、ダブルオーガンダム（オーライザつき）と「ツィードガンダム（浮雲再起つき）で、機体はその場で自由に変えられるようにしてくれ。二つ田は、食いもん、腹が減つては戦はできないからな。三つ田は、向こうの世界についての情報をくれ。四つ田は、俺の基地を造ってくれ。」

「分かりました。それではこきますよ~。」

海斗の体が光りだしたが、すぐに光は治まつた。

「終わりましたよ~。」

「おおー、色々と頭の中に入つてくれる。へえー、これが戦術機の構造か。ん？白銀武とは誰だ？」

「そういえば言つてしませんでしたね。白銀武とはその世界の言わば主人公です。」

「ふう~ん、なるほどねえ~。何回もループして世界を救おうとしてるのか。」

- はい。南の島の地下に基地を造りました、食料は基地の食料保管庫にあります。機体は格納庫に置いときます。後、ハロを何体かと他に欲しい機体どうがありませんたら基地に置いてるパソコンに名前を入力してください送りますね。 -

「おひ、サンキュー。これで準備万端だな！」

- それでは、逝く準備は出来ましたか？ -

「おうつて、ちよつとまで！？行くの漢字が違うぞーーー！」

- ガンバつてください。 -

「人の話を聞けえええええ！」

叫んだ海斗が光に包まれ、輝きが増し光が納まつた時、海斗は消えていた。

こうして彼の新たな物語が始まった。

プロローグ（後書き）

ぶっちゃけ俺の好きな機体しか出ません。続いたら、他の機体も出すかもしれません。期待せずにおまちください。はっちゃけて書きましたがどうでしょう？つといても、まだプロローグなんですね。

第一話（前書き）

ちょっと遅れました。勢いで書きましたが、後悔はしません。たぶん。

第一話

（第一話）

9月22日

「んん~。ここが南の島・・・・なわけないよな~。」

そこは辺り一面瓦礫の山だつた。

「どうだよ!!・・・。ん?」

少し歩いつとした時、海斗はポケットの中に違和感を感じ探つてみた。

「これは・・・・手紙か?」

海斗は不思議に思いながらも手紙を開いた。

「コメンナサイ!!

「こちなり謝られましたよ。」

「そちの世界に送つたのはいいんですが、間違つて違う場所に送つてしまつました。」

「おひめこ」

・現在は帝国付近にいると思こます。すいませんが、後は自力で基

地に向かつて下さい、地図は手紙の中にいれときますので。後現在は白銀武が来る一ヶ月前9月22日です。それでは頑張つてください。b y 神より -

「まつたぐ、困つた神様だぜ。」

文句を言いながら海斗は手紙から地図を取り出す。

「へえ～、これがこの世界の地図か。俺の元いた世界の地図とたいしてかわらんなあ～。」

そう言つて海斗は地図をジツと見ていた。地図には色々載つていたハイブの場所や基地の場所やその他の地名が載つっていた。

「ふむ、ここが俺の基地の場所か。それなりに遠いな。はあ～、まあ引き受けた以上やりますか。」

海斗は少し溜息をついた後、自分に気合を入れた。

「別に空飛んでいつてもいいけど、少し主要人物に”挨拶”していくか。まだ本編に入つてないし。」

そう言つて海斗は口はしを吊り上げてニヒルな笑みをしていた。

「せんずはどこから行こうかなあ～

鼻歌交じり地図を見ながら歩いていると突然目の前に影ができた。

「んあ？なんだ？」

そう言いながら顔を上げると、田の前に真っ赤な化け物がいた。

「…………はい？」

頭にはてなマークを浮かべていると、真っ赤な化け物が腕を振るつてきた。

「うおー！」

ビックリしながらも海斗は、後ろに跳んで攻撃を避けた。

「こいつは確か戦車級だな。（確かにこの世界での情報によるところには生身で接近戦はしないほうがいいんだよな。）」

海斗はそう思いながら、戦車級の攻撃をかわしていく。そのまま世界の人間で武器も持たずに生身で戦車級に勝てる人間はないだろう。

「だが悪いな、この世界の生身の人間ならさつきの攻撃で死んだかもしれないが・・・俺はこの世界の人間でもないしただの人でもないんだなあ！」

叫んだのと同時に海斗は手に一本の刀を造りだし、戦車級の懷に潜り込み刀で胴体を真つ二つに切り裂いた。一瞬の出来事によつて戦車級は倒された。

「何だこんなもんなのか？」

あまりの呆気なさに海斗はそつぶやきながら刀を鞘に収めた。

「「」なんもんなら何体こようがたいした事ないな。はつはつはつは
つ。」

海斗はそうやつて笑つてると、後ろから物音がしそひりを見ると
戦車級がもう一体いた。

「何だまだいたのか、お前も仲間同様真つ一いつにしてやるよ。」

海斗がそいつ言い終わると同時に周りの瓦礫から数十体ものBETA
が現れた。

「はん、まだこんなにいたのかよ。そういうBETAは集団行動で
移動するんだつたな。其処らに、ウォーリアーソルジャー闘士級と兵士級も交じつてやがる。」

そうBETAは集団行動を主にしている。一体いれば数十体はいる
だろうけど、改めて海斗はそう理解した。

「クツクツクツ、まあいいだからこその

刀を鞘から抜き、周囲に六本の魔力の槍を浮かせとくと同時に、B
ETAが襲ってきた。

「殺しがいがあるつてもんよ！－！」

そうじつて、BETAに突っ込んでいった。

こうして彼の「夜神海斗」の新たな戦いが今始まる－！

第一話（後書き）

やつひやつたなあ～。なんだこれ？って自分でも思いましたが、こんな感じにしか書けないのでどうか、優しく見守ってください。

こ

第一話（前書き）

連続投稿！！っていうか、六話ぐらいまで書いてはいるんですけどねえ～。ゆっくり載せていいつと想います。今回も、勢いで書きました。なんでこうなったんだ？

第一話

（第一話）

「ふう～、これであらかた片付いたな。」

彼の周りを見渡せば其処にはBETAの死体の山で埋め戻されていた。海斗は刀を鞘に収め、肩に担いで辺りを見渡した。

「元しても、派手にやつすぎたな」いや。早めに元から立ち去るか。」

そう言つてここから離れようとしたが、地響きが聞こえた。それはドンドン此処に向かつてきていた。またBETAか？と思つたが、どうやら違うようだ。まだ少し離れているが此方に向かつて来る機体が見えたので身を隠した。つとこことは、BETAではなくこの世界にある戦術機だろうと判断した。このまま立ち去るかここに隠れてよつと迷つてゐるうちに戦術機はすでに田の前まで来ていた。

「何だこの惨状は！？」

どうやらBETAの死体の山に戦術機に乗つてる奴は混乱しているようだ。戦術機はどうやら武御雷のようで、色は赤と白だ。それとどうやらリーダーかなんかに引っ掛けたのか向こうが俺に気づいたようだ。

「其処にいるのは誰だ！？」

俺は、そのまま気配を消して立ち去るかどうか考えたが少し挨拶だ

けじと」「つと判断した。

「どうもおー。」

「貴様は誰だ？それとこの惨状はなんだ！？」答える。「

無抵抗の意思の主張も込めて両手を上にあげて出て行ったのだが、向こうも混乱しているのか怒鳴りながら此方に銃を突き付けてきた。

「人の名を聞くときはまず自分からだろ？それとこつらは俺が倒した。以上。」

「貴様ふざけているのか？この数を戦術機もなしに出来る筈がない！」

「お前の眼は節穴か？今日の前にB E T A の死体の山が何よりの証拠だ。それといい加減に名前を名乗つたらどうだ？」

「・・・・・月詠 真那だ。」

「俺は夜神 海斗だ。それじゃ、サイナラ。」

そう言って俺は何事もなくたちさ「待て貴様。」れませんでした。チクシヨー！

「我々と一緒に来てもらおう。後、貴様に拒否権はない。」

「それでも嫌だと言つたら？」

振り返りながら俺は聞いてみた。

「悪いが、力ずくで連れて行く。」

「武御雷がこちらに銃を突き付けてきた。俺は笑いながら、返答した。
「ハハハハハハハハハハハハハハ、そんな機体で俺を倒せると思つ
てんのか？」

「試してみるか？」

「どうやら俺の笑いが癪に障つたのか殺氣をビンビン感じじる。後ろに
いる三機の白い武御雷も此方に銃口を向けてきた。

「しょうがねえな、相手してやるか！ でるーー ガンダームーーー

手を上に掲げて指を鳴らした。すると、何処からともなく「ゴッドガ
ンダム」が腕を組んで現れた！ すぐ、本当に来たよ。

「な、なんだその戦術機は……どこから現れた……」

向こうには急に現れた「ゴッドガンダム」に驚いていた。そのうちに俺は
コクピットに乗り移つた。

「戦術機？ そんなオモチャとこの機体とでは格が違う。」

「なー？ 我々の戦術機がオモチャだとー？」

「貴様！ 我々を侮辱するつもりか！ ？」

「フン、ならば実力の差を見せてやる。」

「ゴッドガンダムの人差し指を出し、「！」といいつと挑発した。

「ふ、ふざけるなあ…………」

「まで、神代…」

「神代！」

「神代ちゃん！」

白い武御雷の一機が俺の挑発に乗つて背中に付けてた剣を掘んで向かってきた。

「はあ…やあ…」

「やはり遅いな。」

相手は俺を切り裂こうとしてくるがそれを全て受け流しやギリギリの所を回避したりしている。やはりガンダムと違い、まつたくもつて遅い。よくこんなで今まで生きてこれたな。

「なんでなんであたらないんだ！？」

「其れが貴様の全力か？所詮はこんなものか。」

「…? 黙れ…………！」

怒りにまかせて剣を振つてくるそれには、先ほどと違ひ隙だらけだつた。そろそろ潰すか。俺は上段からの攻撃を左手で掴んだ。

「なつー！片手で掴んだだとー。」

「フン。はつー。」

そのまま掴んだ剣を右手で叩き追つた。その折れた刃を武御雷の腹部に突き刺し、赤い武御雷の方に蹴り飛ばしてそのまま跳躍した。

「なつー、なにーと、跳んだだとーー！」

「そんなー！跳躍コニーチトも使わずにこの高さなんてーー？』

「あ、ありえないですわーー！」

相手が驚いているうちに俺は腰についているバーモンサーベルを抜き、一機の白い武御雷の間に入り回転しながら腕と足を切り裂いた。

「巴、戒、大丈夫か？」

「ぐ、平氣です。」

「だ、大丈夫ですわー。」

「殺せなかつただけでも感謝するんだな。次は貴様だ。」

「くつー！なんだというのだその戦術機はー！それにさつきの機動性はなんだ、跳躍ユニットも使わずにそのジャンプ力はー！それとその腰に差している兵器はなんだー！」

「ゆつたはずだ、貴様らのオモチャとは格が違つとな。それとこのMSは『ジドガンダムだ、戦術機ではない。』

「MS? ゴッドガンダム? なんだそれは? そんなの聞いたこともないぞ。」

「当たり前だ、この世界には存在しないのだからな。」

「何？どういう意味だ？」

「……から先は俺に勝つたら教えてやる。いくぞ！」

そして俺は構えを取る、ゴッドガンダムの必殺技の一つ。胸部中央の装甲を開き、内部のエネルギー・マルチ・ライヤー露出され、そこにキング・オブ・ハートの紋章が浮かび上がり、背部の羽状が展開され日輪のような光の輪を発する。

「俺のこの手が真っ赤に燃える！」

「勝利を掴めと轟叫ぶ！」

「爆熱！ゴッドオーフィングガード！」

「くつへはあ——！」

俺のゴッドファインガーと武御雷の剣が一瞬ぶつかり合つたが、それもすぐに終わってしまった。

「な、なに！」

ゴッドフインガーの出す高熱によつて剣が溶けて折れてしまつたのだ。

「つお———！」

「し、しまつた！」

折れた剣に呆然としてる隙に、ゴッドファインガーで武御雷の頭部を掴んだ。さすがに殺してしまつのは悪いので、頭部を掴むだけにした。

「俺の、勝ちだ。」

「ぐつ。降参だ。」

そういうつて頭部から手を離し、武御雷を解放した。武御雷はもう動かないだろう。相手がどうやら「クピットから降りてきたような」で俺も降りた。

「貴様、本当に何者だ？」

「俺は夜神 海斗だ。それ以上でもそれ以下でもない。」

「フツ。答えになつてないがまあいいだひつ。改めて名乗ろう、私は月詠 真那だ。」

「神代 畏。」
カミヨウ タジル

「巴 雪乃。」
トモエ ユキノ

「戎 美凪ですわ~。」
ヒビス ミナギ

「 セウカ。 そんじや、 僕はこれでサヨナラだ。 」

今度こそ俺は振り向いて歩き出した。

「 待て。 」

「 ぐへえ、 ゲホゲホいつたいなんだよーいきなり首根っこを掴むな
よ、 苦しいじゃねえか！ 」

「 す、 すまん。 すまないが私たちを帝都まで連れて行ってくれない
だらうか？ 」

どうじょづかなあー。 はつきり言つてめんどくさいが、 ここからを
ここに置いとくとまたBETAが来るかもしれないしなあー。 しょ
うがないか。

「 わかった、 帝都まで連れて行こう。 ただし、 拘束とかは勘弁だぜ。 」

「

「 わかった、 感謝する。 」

「 そんじや行くか。 」

俺は「クピットに戻り、「ロッドガンダムの手に彼女らを乗せ、そのまま低空で飛びながら帝都へと向かった。挨拶だけのつもりがこんなことになってしまったとはねえー。これから一体どうなるのやら。」

第一話（後書き）

何だこの急展開は？自分で書いてもあれ？って思いました。
描写もびみょーだなあ～。誰か文才をくれませんか？

戦闘

第三話（前書き）

遅くなりました！仕事が忙しくて大変です！死ねる！

第二話

（第二話）

やべえーな本氣で逃げよつかなどうかな。ん？なんで俺がこんなこと思つてるのかだつて？それは現在進行形で政威大將軍に会うことになつたからだよ。ぶつちやけ言つて煌武院コウブイン 悠陽コウヒだな。なんでこいつなつたんだろ？なあ。

（回想）

俺は月詠に案内されるままハンガーに向かつた。途中で色々と周りに注目されていたがな。一先ずハンガーに着いたので、月詠たちを手から降ろし、何か周りと話した後俺に向かつて手招きしている。降りて来いといつことだらう。俺はコクピットを開け降りた。

「話はついたか？」

「ああ。こじまで送つてもらつたこと感謝する。」

「良こつてことよ。そんじゃあな。」

去りうとする俺の首根つゝを掴む。だから苦しそうなつのは…

「ゲホゲホ、今度はなんだよー。」

「い、いやその、こじまで送つてもらつたお礼がしたいのだがどうだ？」

「ん~。やうだなあ、無下に断るのも失礼だし、有り難くお礼を頂戴しよう。」

「うむ。私は報告があるので誰かに案内させよう。では誰か案内でも「ワシが案内しよう」ぐ、紅蓮大将殿！」

「だれだおっさん?」

「ワシは紅蓮大将だ。お主の名は?」

「俺は夜神 海斗だ。よろしく。」

俺と紅蓮大将は握手した。周りの奴らが何か驚いているが無視しう。

「では案内しよう。月詠、殿下に報告して来い。」

「はっ!」

月詠たちは紅蓮大将に敬礼して去つてつた。周りの奴らは俺のゴッドガンダムに群がつていたので、紅蓮大将に頼んで散つてもらつた。

「にしても夜神、あの戦術機はなんだ?ワシでも見たことがないぞ。」

「

「あれは戦術機じやない。MSだ。名前はゴッドガンダム。」

「MS?ゴッドガンダム?なんだそれは?」

「あんたらの戦術機よりも優れた機体とだけ言つておこりうかな。」

「

「まいとか？ふむ、では今度模擬戦をしようではないか。」

「別にかまわないが、手加減しないぜ。」

俺はちよつと悪戯っぽく笑つた。すると紅蓮も笑いだした。

「まつまつまつ、それは楽しみだ！」

そんなことを語り合つてゐる内にドアから部屋に着いたようだ。

「それでさ、まいだ賣いでおれ。もつ少ししたら月詠も来るだろ？』

』

「そんじやね言葉に甘えて。ふう～。』

言われたとつり俺は床に寝そべつてリラックスした。紅蓮が何がおかしいのか笑つてゐるが、問題ないだろ？少しだけ仮眠をとるか。ぐづう～。

30分後

「む、来たようだな。』

「ん？なにがだ？」

「月詠が。』

「お主そんな」ともわかるのか？』

「彼女の気を探知しただけだ。」

「ほつ、それほどの腕前か。模擬戦が楽しみだ、はつはつはつは。」

そして、ドアを開いたのはやはり月詠だった。

「報告が長引いてな遅くなつた、すまない。」

「いや別にかまわない。それで何をくれるんだ？」

「うむ、そのことなんだが……。その前に殿下がお主を呼んでいる。」

「なつ！ 殿下が！ まことか月詠！」

「はつ、本當でいじやいります。報告をしたついでに夜神のことを話したら興味があるよつて、会つて話がしたいので部屋に呼びよつ」と言われました。」

「おじおじ、なんでそんなことになつてるんだ？ 僕はお礼さえ貰えれば用は済むんだが。」

「すまないが殿下からのお言葉だ一緒に来てもうひりが夜神。」

「うむ、殿下を待たせるのも悪い。急ぐぞ、夜神。」

そう言って一人に両腕をつかまれた。は、はずれないだと……この俺が振りほどけないなんてなんていう力してやがるこの二人は！？

「ま、待て！ お礼だけの話じゃなかつたのか！？」

「確かに私はお礼だけのつもりだったが、殿下が呼んでるのであつては話は別だ。」

「観念せい、夜神よ。」

現在

もう諦めて一人の後ろについて歩いていく。一人に自分で歩くと言って、はなしてもらつた。さすがにあの恰好は恥ずかしい。

「ついたぞーんだ。

「無礼のないよつに気をつける。」

「どうやら知らないうちに着いたようだ。気配消して逃げようかな？」
そんなこと思つてゐるうちにドアをノックしていく。

二二

「殿下、夜神海斗を連れてまいりました。」

「入りなさい!」

「はつ、失礼します。」

ドアが開かれてそこにはやはり煌武院 悠陽と侍女がいた。

「そなたが夜神 海斗殿ですね」

「ああそつだけど、用件はなんだ？お礼さえ貰えれば俺はいいんだが。」

「無礼者！殿下に何といつ口のきき方！」

「よい。下がつておれ。」

「くつーはつ。わかりました。」

俺の口の悪さに侍女が怒鳴ってきたが煌武院 悠陽は特に気にしないようだ。後ろの二人はなぜか溜息をはいている。何か悪いことしたか俺？

「それで用件は？」

「はいそれは、月詠をここまで送つていただいたお礼と、貴方が何者かお聞きしたくてお呼びしました。」

「そうだな、俺はこの世界とは違つ世界から来た。つとでも言つておひづかな。」

「違う世界ですか？」

「ああ、これ以上は言えん。」

「そうですか。月詠に聞いたのですが、貴方の乗つてた戦術機いえMSでしたね。その力をどうか我々に貸してくれないでしょうか？」

「断る。」

「「「なつーー。」「

どうやら俺が断つたこと三人はおどりしているが、煌武院 悠陽は表情を変えずに聞いてきた。

「それは・・・なぜですか？」

「たんに俺が群れて動くのが嫌いなだけと軍隊が嫌いなだけだ。俺は強いから一人でも十分奴らと対等、いやそれ以上に戦える。」

「確かにそうかもされませんね。武御雷を手玉にとるような機体性能と聞きました。」

「なつーの話は終わりだな。とつととお礼をもうひとつ帰らせてもらひうざ。」

「貴方はどこかに所属しているのですか？」

「言つたはずだ俺は軍隊が嫌いだと。自分の基地に帰るだけだ。」

「「「「ーー。」「」」

「あー、驚いてる驚いてる。やっぱ個人で持つてるのはスゴーよなあ。」

「そ、それは貴方個人の基地があるという事ですか？」

「ああ。南の島あたりに基地がある（まだ一回も言つてないんだけ

どな)。」

その言葉でさらに驚く四人。驚いてぱっかだなこいつら。

「どうしても手を貸してはくれませんか?」

「ん~。じゃあこいつは紅蓮と俺が戦つて、紅蓮が勝てば手を貸してやる、負ければ俺は田中にさせてもらひ。それでどうだ?」

「紅蓮構いませんか?」

「いいけれどもお願いしてたところです。夜神、貴様の実力見せてもらひます。」

「いつももそいつを聞いたところ手加減しないぜ、殺す気でかかるきな。」

いつして俺と紅蓮の模擬戦(死合)が始まる。

第三話（後書き）

ん~。もうちょっと違う風に書いていたのですが、いつなって
しまいました。

第四話（前書き）

ヤバい！誰かアドバイスください！

第四話

（第四話）

「フッ。お主とこんな形で模擬戦を行なうことになるとわな。」

「まあ、いいじゃねえか。これでお前が勝てば俺はあんた達に手を貸すんだからよ。」

「もうだな。結果がどうあれいい勝負ができる」とを願おう。」

今俺と紅蓮はゴジドガンダムと赤い武御雷に乗つて睨みあつてゐる。いつでも始められるよつて両者構えを取る。

「両者、準備はいいですか？」

「ああ、こつでもいいぜ。」

「此方も回じだ。」

「それではこきます、始め！」

「つま――――――！」

「はあ――――――！」

『ゴジドガンダムの拳と武御雷の剣がぶつかり合い火花を散らす』

「ぬん――はあ――！」

「はつ！たあつ！」

武御雷からの剣戟をゴッドガンダムは拳で払い受け流して剣筋をずらしている。

「はつはつはつは、やはりやりますよ夜神！だが防御だけでは、ワシには勝てんぞ！」

「やつこいつあんた」いややるなー。それじゃあお言葉に甘えて、今度は此方から行くぞー！」

拳で払い受け流すのをやめて、俺は攻めに出た。

卷之二

卷之二

俺は一瞬で武御雷の懷に入り頭部に一撃いれた後横に切り返してきたのでしゃがみ足を払った。

「なつ！」

「ぬ、しまつた！」

武御雷が倒れた隙に俺は天高くに飛び、跳び蹴りの構えをとつた。

「てりせああ――――――」

「くつ！なんの！」

武御雷が横に転がつて俺の飛び蹴りをかわしたが、俺が蹴った地面にクレーターができていた。

「今のを避けるとわな。確実に決まつたと思つたんだが。」

「まだまだ」「これからよ、」「これほど楽しい勝負をそう簡単に終わらせてたまるか。」

俺たちは同時に笑つた。久しぶりだこんなに熱く戦つたのは。だからこそ、俺はこいつを本気で倒す！

「あんたに一言謝つておひづれ、すまない。」

「なんだいきなり？」

「何あんたを甘く見ていた」と、戦術機をオモチャ呼ぱわりしたことにしての謝罪だ。」

「ほつ、確かにお主の機体を見ていると戦術機がオモチャに見えるかもしけぬな。」

「だが、ここからは、本氣で行かせてもいい。」「ぐぢ、ゴシズラッショターフーン！－！」

俺は腰についてるビームサーベルを抜いて回転しながら武御雷に一気にひかよつた。

「はあつー。」

「ふん！」

今度はゴジダガンダムのビームサーベルと武御雷の剣がぶつかり合うが、さつきと違い武御雷の剣がビームサーベルに両断された。

「何という切れ味だ！」

紅蓮は一瞬で剣を断ち切られたことに驚いていたがすぐにもう一本の剣を掴み、俺に振りおろした。

「「はあっ――――――！」」

俺たちの機体が交差してそのまま通り抜け、振りぬいた格好で止まつた。

「「「・・・・・・・・・・」」

周りはその光景に静まるしかなかつた。そして最初に動いたのは紅蓮が乗つている武御雷だった。

「この勝負」

「・・・ああ

「貴様の」

「俺の」

「勝ちだ」「

その言葉を発した瞬間、武御雷の腕が落ちまるで糸が切れたように倒れた。そして長き模擬戦は海斗の勝利で幕を閉じた。その後俺たちは、いつたん部屋に戻った。

「素晴らしい模擬戦でした。紅蓮も満足しているでしょう。」

「ああ、俺も楽しめたし満足だ。」

紅蓮は怪我をしてないが一様医務室に連れて行かれた。

「そんじゃ、約束は守つてもいいぜ。」

「・・・その件ですが、夜神殿我々に力を貸してはくれないでしょうか?」

「それは断つたはずだ、それに約束は約束だからちゃんと守つてもいいぜ。」

「・・・わかりました。それでお礼の件ですが、なにがいいですか?」

「やうだなあー、そんじゃ飯でも食わせてくれそれでいい。」

「そ、そんなことによひじこのですか?」

「おひ。うまい飯を期待してるぜ。」

「わかりました、すぐに持つてこりますわよ。」

そう言つて侍女に持つてくれるよう手をついてくる。この世界の飯は初

めて食いつからちゅつと楽しみだ。

「あつ、さうだこれを渡しておひづ。」

「?なんですかそれは?」

「これは俺の連絡先だ何かあつたら連絡しろ。」

俺は煌武院について言いにくいいな悠陽でいいか。んで悠陽に連絡先を書いた紙を渡した。何やら驚いた顔をしている。

「えつ?ええ!で、ですが力を貸してはくれないのでは?」

「ん?確かに軍隊に力を貸すつもりはねえが、あんた個人になら力を貸してもいいぜ。」

「・・・どうして私に力を貸して下さるのですか?」

「あんたのそのまっすぐな目が気に入ったのと、なにより美人なあんたの頼みだ俺の力でよければ貸してやるよ。」

「び、美人!?そ、そんな私など。／／／／」

顔赤くしちゃって、かわいいねえ~。チクショー!

「・・・・・・・・」

そしてこつちの月詠はどうして俺を睨んで来るんだ?そんなことを思つてゐるうちに飯が来たようだ。持つてきた量からして悠陽たちも食べるのだろう。

「殿下お持ちしま、どうぞされました殿下、顔が赤いですぞ？」

「え？へ、平氣です。なにもありません。／＼／＼」

だいぶ冷静になってきたのか、元の表情に戻ってきた。だが、俺と目を合わせるたびに頬を赤く染めて目を逸らす。そしてその度に月詠に睨まれる。何この空間？

「わ、そんじゃ いただこうかな。」

「そ、そりですね、冷めないうち戴きましょ！」

「・・・はい。」

俺はこの空氣から逃げる為に、話題を変えた。さて飯はサバ味噌定食か。では一口目。

「・・・・・・・・・・・・

「もぐもぐ。どうかされましたが夜神殿？箸がとまっていますよ。」

「夜神どうした？サバ味噌は嫌いだったか？」

「・・・・・・・・・・・・

「・・・まっ」「・・・

「不味い！－！」

あまりの不味さに俺は叫んだ！なんだこの不味いのは本当にサバ味噌か！この世界ではこんな不味いのを毎日食っているのか？

「そ、そんなに不味いでしょうか？いつも食べてる合成サバ味噌定食の筈ですけど。」

「はい。いつもと同じ合成サバ味噌定食の味です。」

「合成、サバ味噌定食だと？なぜ普通のサバ味噌定食をださない？」

「え？」

「なんか変なこと言つたか俺？ただ普通のサバ味噌定食をだせと言つているだけなんだがな。」

「な、なんだ、なんか変な」と言つたか俺？」

「夜神、今の食料事情を知らないわけではあるまい。」

「何だそんなに悪いのか？」

悠陽達が驚きながらも食料事情について教えてもらつたところ、日本だけではなく人類そのものが食料事情は一極化しているらしい。BETAの侵攻による国土の荒廃や就農人口の激減により食料生産力が大幅に減少しているようだ。

「なるほどな。だから合成食なのか。」

「はい。本当に知らなかつたのですね。」

「ですがそれでしたら、今まで何を食してきたんですか？」

「ん？ そりゃ普通の飯だけだ。」

「 「 「 「 」 」 」

「そ、それはほんと「ひですか…？」

「あ、ああ。なんなら見せるわ。」

「 「 「 「 え？」 」 」

俺はそういつて、俺が食料とかを保存している異空間からリンクゴを取り出し、それを悠陽に渡す。（食料とかは腐らないうちに時間を止めてこる。）

「ほれ、これが証拠だ。」

「い、今どこから出したのだ？」

「それは後で説明する。ああ、ちゃんとこれいだからそのまま食べても大丈夫だ。」

「そ、それではいただきます。」

「どうですか殿下？」

「お、おこしい…本当にリンクゴだよ。」

「 「 「 」 」 」

悠陽の言葉に一人が驚いている。悠陽もおいしそうに食べている。

「それで夜神、そのリンクをビームからだしたのだ？」

「俺が創った異空間に食料とかを色々保存してんだよ。そこから取り出した。」

「い、異空間、ですか？そんなことできる夜神殿、貴方は本当に何者ですか？」

「そうだな、俺はこの世界とは別の世界から来た。つとまではいつたな。」

「はい。」

「つむ。」

「そのまんまの意味俺はこの世界とは違つ、いわゆる異世界からきた。そこには魔法があつたり氣というのもある。争いがないとは言わんが、まあこの世界よりは平和な世界からきた。」

「そ、そうなのですか。」

「ん？あまり驚かないのな。」

「いえ、十分に驚いていますが有り得なくもないのです。」

「どうこういじだ？」

「どうしてんだ？俺以外にもこの世界に来た奴がいるけど、なぜいつの
だらうか？」

「横浜基地にいる香月博士と二人がいました、香月博士が論文で
だした因果律量子論で説明がつきます。」

「なるほどな。詳しく述べたの香月博士に聞くつかぬかな。」

「やつした方がよろしくどうしよう。」

「それじゃ、そろそろ帰るかな。」

「やつですか。夜神殿「海斗でいいぞ」わかりました。それでは悠
陽と呼んでください。海斗、また来てくださいね？」

「ああ、また来るよ悠陽。」

「…………」

「ん？ やつした、顔がまた赤いわ？」

「い、いえ初めてお前で呼ばれたもので。」

「やつか。ん？」

「…………」

「うわ～。円詠がめりやくいつを睨んでくれるよ。」

「夜神、いや海斗。私もお前で呼べ。」

「別にかまわないけど、いきなりビーフした?」

「殿下が許したのだ、ならば私の名を呼ぶことを許そ。」

「いや別に用詠でも（ギロリ）わかつたわかつた、そう睨むな。」

俺は小さく溜息をついた。そんで用詠をまっすぐに見て。

「真那、これでいいか?」

「う、うむ。それでよい。／＼／＼」

なんか真那も顔を赤くしている。なんでも?

「やうか、それじゃ元気でな。」

「はい、またいつか。」

「うむ、またな。」

そう言って俺はハンガーに向かいゴッズガンダムのコクピットに乗り込み帝都からだ。そして俺は南の島にある俺の基地にまっすぐ飛んで行つた。

第四話（後書き）

なんだこれ？なんでこんな話になつたんだ？誰か教えてえ――――

第五話（前書き）

ヤバい次の話ができない。誰でもいいから、文才をください！

第五話

（第五話）

あれから俺は無事に南の島に着いた。しかし、何処に基地があるんだ？周りは森しかないぞ！俺は一旦コクピットから降りて、周りを散策すると滝を見つけた。まさかなん〜。そう思つた俺だが一応調べてみた、するとレバー見たいのがカモフラージュされているが見つけた。俺はそれを下に引いた。すると滝が一つに割れたので俺はその中にゴッドガンダムを入れた。すると下に降り出した、このエレベータで地下にある基地に行けるようだ。俺はゴッドガンダムをハンガーにいれたとき、ハロがいたので後は任せた。そのうちに俺は自分の部屋に行きこれからることを考えた。

「わ〜、これからどうしようかな〜。」

独り言を言いながら考える。・・・考えた結果やっぱり重要人物にだけ挨拶に行こうと考えた。一応T.Eの重要人物にも会つ事にしみ。

「さて予定は決まったが、その前にこの基地のことをつけんと調べなことだ。」

俺は自分の部屋から出て、色々見て回ることにした。

「最初はどうにこうつかな？」

部屋に置いてあった小型携帯端末機にこの基地のデータが載つていたので持つてきた。これがあればこのやけに広い基地でも迷う事はない

ないだれつ。そして最初の部屋に着いた。

「ハリは、ブリーフィングルームだな。」

この部屋は結構広いな。それに一人だけしかいないせいかも孤
独に感じる。

「…………次に行こう。」

誰か連れてこようかな？別に誘拐するわけではないぞ！ただ、悠陽
達でも連れてこようかなと思つただけだぞ。ホントだからな！俺は
誰に言つてゐんだろう？まあいいや、次々。

「食堂だな此処は。」

ここも無駄に結構広い。一人しかいないのになんでここまで広いん
だ？まあ、それは後でいいや。帝国で食い損ねた飯を食うか。

「ハロハロ。」

どうやら調理もハロがしてくれるそうだ腕がついてる機械に乗つて
調理しているが、食えるものが出でくるのだろうか？コックがつけ
るような帽子をつっつんにのせているが心配だ。

「出来タ出来タ。」

「つい出来てしまつたようだ、覚悟を決めよう。ござれ。」

「ハ、うまこー。」

「ハロハロ」

なんだ普通にうまいぞ。心配する事なかつたな。美味しいと言つても
らつて嬉しいのかピヨンピヨン跳ねている。これ食べたら次はどこ
に行こうかな？

・・・・・

「色々回つてゐるうちに時間が結構たつたな。」

そつ言いながら小型携帯端末機の機能についている時間を見るとも
う外は夜である。この基地無駄に広すぎ、小型携帯端末機がなかつ
たらぜつたい迷つてゐるな。うん。さて回り終わつたしそろそろ寝る
かな。そつ思いながら、俺は自分の部屋へ歩き出した。

「ふう、今日は疲れたなあ。」

俺は部屋に着いた途端ベッドにダイブした。ベッドで俺は今日会つ
たことを思ひ返した。

「真那に出会い

「紅蓮に出会い

「紅蓮と模擬戦をしたり」

「悠陽と出会い」

そういうえば不味い飯にも出会った?なあ。そんなことを思い返しながら、眠りについた。

・・・・・

「カイトオキロ、カイトオキロ。」

「ん~。朝か。」

おれはハロの声で目を覚ました。

「何か用事かハロ?」

「アサメシアサメシ。」

「朝飯?そのために起こしてくれたのか?」

「ハロハロ。」

「サンキュー。」

お礼を言いながらハロを撫でた。さてせつかく用意してくれた朝飯が冷める前に食堂に行くかな。

「おお～。朝飯は、ご飯と味噌汁と納豆と玉子焼きにワインナーか。
まあ、普通の朝飯だな。」

俺は豪勢な料理より普通の一般的な料理が好きなのでハロ、グッジヨブー！それじゃ、いただきますと。

「やあぱづめえ～。玉玉焼きは半熟がいちばんだなあ～。」

あまりの美味さに何回かお代わりしてしまった。

「さてと、おいしい飯もたらふく食つたし、横浜基地に出向（強襲）しますかな。」

白銀の強さも調べたいが、まだ来てないから我慢しよう。その代わり、A-01（生贊）がどれくらい強いか確かめよう。紅蓮ほどとまでは言わないが、それなりに楽しめ、ゲフン、ゲフン！強ければいいな。今回はダブルオーガンダムで出よう。ん？なんでダブルオーガンダムなのかって？気分だよ気分！

「カイトカイト」

「ん？なんだハロ？」

「オベントウオベントウ」

マジかー！このハロ達は気がきくなあ～。

「サンキュー、ハロ。お腹に美味しいただくぜ。」

「ハロハロ」

「そんじゃ、ハロ、いつてくるな。留守番頼んだぞ。」

「リョウカイリョウカイ」

俺はハロに基地をまかせてハンガーに向かう。ハンガーにはすでにゴッドガンダムからダブルオーガンダムに変わっていた。俺は早速、ダブルオーガンダムのコクピットに乗り込み起動させる。それと同時にハッチが開き地上へと出る道ができた。どうやら、出る道と入る道は別々のようだ。

「よし、いくか。夜神 海斗であるぞ！」

えあ、こいつ。魔女との仲間達に会つために。

第五話（後書き）

短いな相変わらず。挫けそうだ。

第六話（前書き）

遅くなりましたが、投稿します。最後におまけを書いてみましたが、ちょっと書いてみたかつただけなので、短いですけど良かったら読んでみてください。

第六話

（第六話）

ダブルオーガンダムに乗つて横浜基地に向かっている途中。なん
うだうが、向かつてる途中にBETAにであいましたあー。イエ
ーイー！つてなんでだ――――――！なんでこんなとこにBETA
がいんだよー！

「めんどくさいがヤルか。ガンダム使っての初めてのBETA戦だ、
俺を楽しませろよBETAどもー！」

俺はGNソード？を両手に持ち、BETAに突っ込んだ。まず目の
前にいる敵を殲滅する！突っ込んできた、要撃級を斬り伏せ、ライ
フルモードで突撃級デストロイヤーを撃ちぬく。数はざつと3000つてところか
な？どんどんいくぜえーーー！

「わいそらわいじーー！」

俺は武器をライフルモードにしたまま、飛んだままビームを撃ちま
くった。レーザー種がいなから落とされることはないだろう。た
まに、ソードモードにして、要撃級と突撃級を斬り伏せ撃ち抜いて
いく。これくらいならトランザムも使つほどではないな。

突っ込んできた、突撃級を撃ち抜く。

「やーおー！」

要撃級の頭部を切り裂く。

「邪魔あー。」

要塞級の触手を切り裂き、胴体を斬り伏せる。
フォート

「おひあー。」

こいつやって小型種から大型まで倒して行つてゐるが。

・・・・・

三十分後

「ひひぜえ――――――！」

なんだよこいつらー？Gですか？ゴキですか！？うじゅうじゅ沸いて出てきやがつて・・・。トランザム使おうかなあ。でも使つたら負けな様な気がするしなあ。けどいい加減に、横浜基地に行きたいからなあ。こんなことなら、火力主体の機体に乗つてくれればよかつたかな？いつそこいつらを無視して、横浜基地に行こうかなあ。

そつ愚痴をもらしながらも俺は黙々と奴らを倒して行く。あつ、地中からも出でてきた。く・そ・があ――――――！

・・・・・

一時間後

「これで・・・ラスト-----」

俺はGNソード?のソードモードで最後に残っていた、要撃級を切り裂いた。お、終わった!…やつとこさ終わつた!!あれからさらに一時間も戦い続けてやつとこさ全てを倒し終わつた。これでやつと、横浜基地にいける。そう思つて俺は、ダブルオーガンダムを横浜基地に向けて再び進もうと思つたらレーダーに反応があつた。

「なんだ?またBETAか?はあ~。」

俺は溜息を吐きながらレーダーをチェックした。ん?どうやら今度はBETAではなさそうだ。これは・・・戦術機だな。この方向からだと、横浜基地から送られてきた戦術機かな?まあ、いいや。来るのは四機か。ここに向かつてきてるようだし待つておくか。音楽でも聴こうかな。

数分後

「そここの戦術機!!この惨状はなんだ!??

ん?来たようだな。小型携帯端末機に入つてた曲を聴いてるうちにご到着のようだ。戦術機は・・・不知火、か。それにあのエンブレ

ムは、伊隅ヴァルキリー・ズだな。グッドタイミングってやつですか
？一先ず先に返答しないいとな。

「「」の惨状はなんだと言われても、BETAがいたから倒しただけ
と、その死骸としか言えないのだが。」

「ならば所属している部隊はどこだ？後、その戦術機はなんだ？そ
んな戦術機見たことがないぞ。」

この声は多分、伊隅みちるの声だな。さて、なんて答えようかな？
一応、帝国とでもいうか？ダブルオーガンダムについては開発中の
機体ともいいうことにするか？悩ましいなあ。いつそ、別の世界
から来ましたつとでも言つか。

「俺はどこにも所属していないし、この機体については、喋るわけ
にはいかない。」

「貴様は、ふざけているのか？貴様を横浜基地に連行する。」

「怪我しないうちに降参した方がいいわよ。」

今度は、別の声まで混ざってるな。この声は、速瀬水月の声だな。
にしても、なんでこいつらこんなに余裕なんだ？このBETAの惨
状を見ても俺に勝てると思つてんのだろうか？クックックック
ツクツ、たかが不知火如きで、俺も舐められたもんだなあ。

「クックックックックック。」

「何だ氣でも触れたか？」

「！」の状況に気でも狂つたのでは？」

「やのよひですね。」

今度は、宗像美冴に風間禱子の声も聞こえた。やはりこの部隊は伊隅ヴァルキリーズのようだ。ならば、ヤルことは決まっている。

「なあ、あんたら伊隅ヴァルキリーズだら？」

「…なぜ我々の部隊のこと知つていい…」

「ああ？なんでだろ？なあ～。」

「・・・まあ、いい。基地に着いたらたつぱりと時間がある。あとは、基地に着いたら話してもらおう。」

「・・・おまえらが、俺に勝てると思つてんのか？」

俺は一応彼女に聞いてみる。

「アンタこそこの状況を見て勝てると思つてんの？」

そう言つてこひらに突撃砲を向けてくる四機。それに対しても俺は腰につけてこるGUNソード？を掴み。

「ああ・・・勝てるぜ。」

俺は、そつこつた瞬間に速瀬水月に斬りかかった。

「・・・・・・」

「おひああああ！」

「く」

瞬時に突撃砲から背中に付けてある長刀に持ちかえて、俺の攻撃をギリギリ防いだ。俺はすぐに相手を蹴飛ばして、相手の機体はバランスを崩してしまい、後ろに倒れてしまう。

「しまつた！？」

「まあは・・・一機目。」

そういうつて、速瀬水月が乗る不知火を踏みつけ、両方の腕部を斬り落とし、頭部にGNソード？を突き刺した。

「次は誰だ?」

「くつ！通信が急にできないうぞ！なんでだ？しかたない、宗像、風間！接近戦は控えろ！遠距離攻撃を主にしろ！」

「了解！」

通信が使えないのに気づいたようだな。オープン回線に切り替えた
ようだ。さすがわ隊長殿だけはある、それに瞬時にこたえるとは、
情報道理この部隊は中々良い部隊だな、伊隅ヴァルキリーズ。

「だが。

俺はソードモードをライフルモードに変えて、狙いを定めトリガー

を、引いた。放たれたビームは、宗像美冴の機体の右腕を撃ち抜かれていた。
風間禱子の機体は頭部を撃ち抜かれていた。

「「「なつーーー」」

「悪いがこのGNソード、ソードモードからライフルモードに変えて、遠距離攻撃もする事ができるんだよ。残念だったな。」

少し説明？してやったが、わかつただろ？なんか動きが止まつてこりのだが、どうしたんだろうか？機体に不具合でもあつたのだろうか？

「貴様。今のアレはなんだ？」

「アレ、とは？」

「今のピンク色の光は、なんなかと聞いている…？そんな兵器…・見たことも聞いたこともないぞ…！」

伊隅みちるが此方に怒鳴つてくる。ああ、そういうことね。この武器…・GNソード？に驚いているのか。そういえばこの世界にはビーム兵器が存在しないんだつたな。

「このピンク色の光はビーム兵器だ。」

「「「なーー？」」

「フン。貴様らが知る必要はない。」

「な、何故そんなものを貴様が持つていいの…」

そう言つて俺は、再び相手に攻撃を再開した。だがそれも一分もかからずには終わってしまった。宗像美冴の機体の今度はもう片方の腕部を斬り落とし、脚部に突き刺し、コクピットを外すように腹部にGNソード？を刺した。伊隅みちるの機体は、この部隊の中で一番もつた方だが、それでもすぐに決着はついた。チャージショットで両腕を撃ち抜き、頭部を撃ち抜いて終わった。今は伊隅みちるの機体の腹部を踏みつけている。

「ぐつ、なんて強さだ！」

「あんた！本当に何よ、その戦術機は！？」

……前にも言ったが、話すつもりはない。なぜなら貴様たちは

言いながら再びDNソード？を、ライフルモードからソードモードに切り替える。

「死ぬからだ。」

「？」

「」の機体の情報を他にばらされては困るんでな、運が悪かつたと

思え

言い終わると俺は、GNソード？を踏みつけている不知火・・・伊隅みちるの「クピット田指して突き刺すように振り下ろした。

「なんてな。」

「「「「は？」」」

俺は踏んでいる不知火から、GZNゾード?と足を引かれる。

「冗談だよ、冗談。別に俺にあんたらを殺すつもりはないよ。」

「「「「……。」「」「」」

「……なぜ私達を生かす？情けのつもりか？」

「はあ～。別に俺はあんたらを殺す理由がないから殺さないだけだ。あつたら別だけどな。」

「「「「……。」「」「」」

はあ～。無言になっちゃった。どうしようかねえ～、この状況をどうにかしなくては息が詰まってしまうな。そういうえば、ここから倒してしまったけど、どうやって帰るのだ？～

「なあ？」

「・・・なんだ？」

あまり元気はないよつだ。まつ、俺のせこですけど向か？

「あんたら、どうやって横浜基地に帰るんだ？」

「…………あ。」「…………」

「…………」

「…………」「…………」

無言が続く。

「す」「いいぞ。」「…………まだ何も言ひたくないのだが?」

「横浜基地に送つて行けばいいんだろ?」

「あ、ああ。そうだが、いいのか?」

「俺もそこに用事があつてね。あんたらを連れていくつこでにな。」

「……それはどんな用事だ?」

「ん?なんか警戒されてるな。まあ、そんな状態で警戒されても意味ないと思つけでな。」

「ちよつとばかし、あんたらの上司に話があつてな。安心しり、本当に話があるだけでそれ以外は向こうが何もしてこない限り、こちらも手は出れない。」

「……わかつた、信じよう。」

「あら?えらくあつたり信じてくれたな。まあ、」しかししては話が

早くていいんだけどな。

「そんじゃ、四人とも出でて、手の上に四人が乗る。なんかデジヤブを感じるな。

「わかった。」

そう言って四人も出てきて、手の上に四人が乗る。なんかデジヤブを感じるな。

「そんじゃあ、こきますか。」

これでやつと、横浜基地に行ける。これから先どんなことが待ち受けているのかねえ。まあ、まずは魔女とのご対面だな。その後は・・その時にも考へるとしよう。

おまけ？

私たちは今、目の前に浮いてこっちを見据えている戦術機？に恐怖していた。その戦術機は、異様に伸びた四肢と細身のフォルム。頭部にある目が四つついていて、赤い光をまき散らし、血のようになつ赤なカラーリングも相まって、他の戦術機とは違ひとてつもない恐怖を感じている。

「なあ、あんたら伊隅ヴァルキリーズだろ？」

「・・・だつたらなんだ？」

伊隅隊長が絞りり出すよつて言葉を返す。

「殺しげいが、あるつてもんよーー！」

そつ叫んだと同時に此方に向かって大きな剣を振りかざして襲いかかつてきた。それを私は背中に装備していた長刀で何とか防ぐ。

「へっ、あんたは一体なんなのよー!？」

「俺は俺だあーーー！」

なによこいつはー?なんなのよー!そんなことを思つてゐるうちに私は長刀が真っ二つに斬られ、そのまま両腕も斬り落とされ。その後は、伊隅隊長も宗像も風間もまるで遊ばれているよう、次々にやられてしまった。でも、誰も死んではいなかつた。どうやら、こいつは私たちを殺すつもりはないようだ。すると向こうから通信が来た。

「何だ、たいして強くもねえな。」

私はそのあまりにも舐められたその言葉にとつもない屈辱と敗北感。「イツのあまりの強さに。この戦術機の脅威に。私は再び恐怖を感じた。

「とにかく、あんたらの大将に言つておいてもう一ことがあるんだけどよ。」

「・・・なんだ?」

「俺を傭兵として雇わねえか?って聞いておいてくれ。それだけだ。連絡はこにしてくれ。じゃあな。」

そういうつてあの戦術機は赤い光をまき散らしながら、去っていく。

こうして、赤いMS・・・アルケーガンダムとそのパイロットは魔女に雇われて、仲間?とともにBETAビもと戦つて行くのはまた別の話であった。

第六話（後書き）

やつひやつたぜー！ ひとりで書いてみたけどキツイな、なんか。

第七話（前書き）

久しぶりの投稿です。本当に久しぶりに戻ってきたなあ）。感想を書いてくれた人たちは、とても勉強になりました。また何かアドバイスでもあれば、書いてくれると、ありがとうございます！では、つまらないかもしれませんが、どうぞ！

第七話

（第七話）

あれから俺はヴァルキリーズの四人を連れて横浜基地に向かった。ヴァルキリーズのおかげですんなり横浜基地の格納庫に入ることができたまでは良いのだが、なんか下で武装した集団が待ち構えてるんですけど、どうするかなあ？そんなことを思つてると、一人の女性がマイクを持つてこちらに呼びかけてきた。

「その機体にのつているパイロット、すぐに出てきなさい。」

・・・なんかそんなこと言つているが、そんな武装した奴らがいたら、降りたくもないんだが。まつ、これくらいの奴らに負けるわけはないのだがな。しうがない、降りるとするか。

「了解、今から降りるからその武装集団をどひにかしり。」

「・・・・わかつたわ。」

そつ言つて手を上げると周りにいた奴らは武器を下げた。さて降りますか。俺はコクピットを開け、・・・飛び降りた。

「　　「　　「　　「　　」　　」　　」

驚いてる奴らに構わず俺は地面に静かに着地し、マイクを持つてる女性に話しかけた。

「ほり、降りてきたぞ。」

「え、ええ。」

「なんだ？何か話でもあるのか？」

「あ、そうね。ついてきなさい。」

そう言つて歩き出す女性。俺はその後ろにつけこんでいく。

エレベーターに乗つたりして移動していくと一つのドアの前に着いた。

「エレベーターに入りなさい。」

「はいはー。」

俺は返事をしながら部屋に入ると後頭部に銃を突き付けられた。

「あなたこは色々と聞きたことがあるのよ。答えておひがつよ。」

そう言つて少女が入ってきた。

「あなたこは色々と聞きたことがあるのよ。答えておひがつよ。」

「なあその子は「質問するのせいいつちよ。」はいはい。」

俺は女性にそう返事をして、田でビーフをと答えた。

「まずは、あんたの所属と目的。次に、あの戦術機はなんなのか。そして最後に、あんたは何者か。」

「ん~。まず初めに俺はどこの国にも部隊にも所属してはいない。目的は、秘密。次にあの機体は戦術機ではないMSだ。名前はダブルオーガンダム。んで最後に俺のことだが、名前は夜神 海斗だ。以上。」

「・・・・・あんたふざけてるの?」

「わあ?どうだう?」

「・・・・・社。どう?」

社?神からもらつた情報にそんな名前があつたな。ということは、この女性が香月夕子か?なんか一人だけで話しているが隙だらけだな。いい加減イライラしてきたし抵抗するか。

「なあ、いい加減に銃をしまつてくれないか?」

「・・・それはできない相談ね。あんたがなんの目的があつてきたか教えてくれたら、考えてあげるわ。」

考えるだけで、銃は下げるつもりだろう。それなら俺もそれ相応の態度で示そう。そう思考した俺は一瞬で手に刀を造り振り返りな

がら下から上に向かつて銃を切り裂き、相手の首に添えた。

「なら俺も、あんたと後ろの少女について教えてくれたら、話してやつてもいいぜ。」

「……ぐつ！」

うわあ～、めちゃくちゃ睨んでくるよ。そんなんじゃ美人が台無しだな。後ろの子はじい――――とみてくるだけで何も言わないからよくわからないが、この子からは何かを感じるな。

「……」

おお～い。何か言ってくれないか？さすがに空気が重いなあ～。そんなことを思つているとやつと向こうから話し出した。

「……わかったわ。何が聞きたいの。」

「それじゃ、まずは名前。次に後ろの少女の名前。他は……特にないな。」

「……それだけ？」

「それだけだが？」

「……」

な、なんだこの雰囲気？別に神にこの世界の情報は記憶してるから特に他に聞くことはないのだが、どうするべきか。そんなことを思つていると服を引っ張られる感じがしたので、引っ張つての方を向

くと、社が服の端をつかんだ状態でこちらをじい————つとみ
てくる。なんだかよくわからんが、一先ず自己紹介をしよう。まあ、
知ってるんだが一応聞いといひ。

「初めまして。さつさつしたが俺の名前は夜神海斗だ。君の名前は
？」

「……社 霊です。」

「さうか。いい名前だな。」

俺はそうさつて頭を撫でてやる。社の頭を撫でた後、香月タ子の方
を向いた。

「それであんたの名前は？」

「……はあ。香月 タ子よ。」

「さうか。そんじゃ、俺の質問に答えてくれたので、俺もあんたら
の質問に答えよう。何から聞きたい？」

置いてあるソファーに座りながら聞いた。香月も社も俺がソファー
に座るのを見て前に置いてあるソファーに座った。

「さつさつ聞いた事について答えなさい。」

「さつさつ聞いたことって、俺が何者かとかさつ奴か？」

「ええ、さうよ。早く答えなさい。」

まあ、隠すほどでもないから本物のことを語つか。

「まぢは、やつも言つたが名前は夜神 海斗だ。偽名でも何でもないからな。次にあの機体はMSといって戦術機ではない。名前はダブルオーガンダム。次に・・・。」

「待ちなさい。」

「ん?なんだ?」

「あのせん「MSな。」そのMSつていうのはなんなの?」

そこから説明か。めんどくさいな、簡単に説明するか。

「MSつてのは、地球上や宇宙空間で主に活動することのできる機体で、敵対勢力との戦闘を目的として造られた機体もある。それと俺が乗っているダブルオーガンダムは、GNドライブ、通称「太陽炉」と呼ばれる半永久機関を搭載しているが、太陽炉は起動開始から常に「GN粒子」と呼ばれる特殊粒子を生成し、機体の稼動エネルギーのほかに、高濃度圧縮した粒子による強力なビーム兵器、飛行用の推進剤（GNバーニア）など様々な用途に利用されている。そのため時間単位で生成できる粒子量には限度があり、これを上回るペースで粒子を消費していくば、新たに粒子が生成されるまで一時的にエネルギー切れになる。まあ、無理しなければ大丈夫なんだけどな。説明はこんなもんかな。」

「・・・驚きすぎて言葉が出ないわね。」

「まあ、IJの世界にはない機体だからな、しょうがないだろ。」

「…？」まああなた、この世界にはない機体つていつたかしら。」

ソファーから身を乗り出す勢いで香月は聞いてきた。

「ああ、言つたな。ついでにひとつ、俺もこの世界の住人ではない。いわゆる、異世界人だ。」

「…？」

「やうこりじだから、俺はどこの国にも部隊にも所属していないところことだ。」

俺がそりこりと香月はソファーに座り何かを考えるようなポーズをした。

「…・・・あんたが私に嘘を「こんな嘘をついてなんのメリットがあるっていうんだ？」・・・・・。」

「まあ、いきなりそんなこと言われても信じられないだろうな。俺だったら、そんなこと言つ奴が出てきたら、追い出すね。だから模擬戦をしないか？」

「模擬戦？」

「ああ。この基地にある戦術機と俺の機体で模擬戦をして、圧倒的な差で勝利すればあんたも納得するだろ？」

「…・・・・・そうね。それなら私も納得して・・・いいえ、するしかないでしょうね。」

「決まりだな。それで予定は何日でいく？」

「今からよ。」

「マジですかあ～。今日はこれで帰るつかと思ったんだが、本人がい
いと黙っているのならしょうがないか。

「わかった。そんじゃ、準備ができたら呼んでくれ。俺は格納庫の
方にいるから。」

「うつむいて俺はソファーから立ちあがる。そしてそのまま部屋の外
へ出ようとして歩き出す。

「ねつねつの前に見ておきたいものがあつたんだった。」

俺は再び番円に振り返る。

「なにかじりへ。」

「鑑 純夏を見せてもらひてもこいか？」

「「...」」

「なんか一人が滅茶苦茶俺を警戒してるとんだが、なんか変なこと
を言つたか？」

「どうしたんだ? いきなり警戒心なんか出して。」

「・・・あんたそんなことまで知つてゐの?」

そんなこと？・・・・・ああ、なるほど。そういえば極秘だったな。コレ。

「まあな。この世界に今から何が起こるかも知つてると言つてもいいな。」

まあ、俺の記憶どおりに行くかどうか知らんけどな。

「なんですか？」

「そういえば、第四計画があまり進んでないんだつたな。」

俺は少し意地悪く言う。

「！」

だが安心しろ、第四計画は成功する

- - - ! ? 「」

これが、魔女と俺との最初の・・・話し合い？（追いかけっこ）であった。ちょつ、眼が怖つ！

第七話（後書き）

相変わらず短くて済みません。どうにか頑張っているのですが、これくらいが俺の文章力の限界なようです。それでも読んでくれる人のために、これからもがんばって書いていこうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3195o/>

最強が行く世界その名は、マブラヴ！？

2011年6月2日05時02分発行